

見直された地区大会

男 尾形 繁之

北海道にロータリーが生れて四十年、その記念をかねて第三五〇、三五一両区連合の年次大会に参加して、教えられたところが多くあった。会場——北海道厚生年金会館——と大会設備が行届き、運営万般が円滑にすすめられたことは、主宰の松井、塩谷両地区ガバナーはじめ、ホストクラブ、関係各位の周到な準備と協力の結果と存じ、心から感謝と敬意をささげたい。

第一、二日とも朝食会にはじまり、部門別協議会七つと、パネル五つを含んだ大会プログラムの内容は、きわめて豊富にして多岐、なかでも、アジアのためにロータリアンは何をなしうるか」と題し、日本、韓国、フィリピン、タイの四方国から、いずれもかつて地区ガバナーをつとめ、また理事その他として直接R Iの

任務経験をもたれる方々をパネリストとした国際的なタウンミーティング——パネル——は、予告どおりこの大会ハイライトのひとつであった。

Bhichai Rattakul 氏 (第三三〇区タイ) は、アジア地域における世界社会奉仕は、約束された将来があるが究極の可能性に到達するにははるかに遠い。その挑戦をうけているロータリアンが論議よりも、まず実践の必要を強調、その事例としてタイ東北辺境の僻村における教育と生活改善計画に対するわが第三五五区の支援、また他の救地域の学校建設、血液銀行開設に対する第三五七、三五八両区の援助などをあげて、もう一度見直せば、このような奉仕の場は限りなくあることを説かれた。

Sabino Santos 氏 (第二八〇区フィリピン) は、世界社会奉仕が対象地域の人々の物心両面の生活向上と、これに協力し合う国相互の親善関係を深めるものとして、クラブとか国の貧富の差を超えての互助から、発展国と発展途上国とが近接するアジアでは、かかる奉仕活動の余地が多いことを指摘、その一例としてフ

イリピン、韓国、ラオス間の技術協力をあげ、また自国医師の派日研修計画についての希望などを述べられた。

金永韶氏 (第三七六区韓国) は、経済と科学技術の進歩が外的環境の汚染と、それにもまして人間精神の頹廃を深めつつあること、日本だけでなくすでに韓国にも、物的発展と心的荒廃に根ざす社会不安とアンバランスが進みつつあるので、アジアにおける世界社会奉仕はこの不安と不均衡の排除、相互信頼による共存共栄をめざすべしと力説された。更に将来はアジアとオーストラリア、ニュージールランドのロータリアンが相互理解と親善のために、地域大会の開催が望ましいと強調された。

松本兼二郎氏 (第三七〇区日本) は、世界社会奉仕が国際、地域両社会奉仕の結びついた活動であり、ロータリー財団とは異った意味でわれわれの理想実現への力を増しつつあること、またこれには諸他の奉仕以上に適切なアフターケアの措置が大切であるとして、かつてニュージールランドからアジアのある地域に中古の農業機械を贈るにあたり、ロータリアンの技術者数名を合せ送って、その使用、修理、保全につき懇切に実地訓練を重ねた実例を引用、地理的近接により諸条件のよいアジア諸国間で、このような方式の採用を勧められた。

以上、きわめて不十分な要約のうちにもうかがわれるように、四氏の意見主張には今後の世界社会奉仕の在り方についての問題と示唆が多くふくまれていた。続いてパネリスト同士、またフロアとの間に活発な質疑討論が行われたが、それによってこの国際的な新しい試みを更に実りの多いものとするには、プログラムのなかで最長の九十分でも、なお時間不足であったことは、まことに残念である。

なお、第二日のステージ上で、北海道の全ロータリアンから韓

国、フィリピン、タイの前記三氏を通じて、第三七六、三八〇両区には、先般それぞれの区内を襲った大洪水救援の資金が、また第三三〇区にはタイ国国立病院の病室増設のための資金がおくられた。パネルを早速実行に移したこの番外プログラムは、受けるもの、贈るものと共に、私の心も温められた一幕であった。

(第三六六区直前ガバナー)